

特集：東日本大震災から15年

オペレーション・ブlessing・ジャパンは、米国バージニア州国際NGO Operation Blessing International(OBI)と連携し、イエス・キリストの精神に基づき国内外で活動している団体です。OBIは、深刻な状況下で苦しんでいる人たちに救いの手をさしのべるため1978年に設立、世界90の国や地域において実践的な活動を繰り返しています。

東日本大震災から15年 P1
 当時を振り返って
 活動スタートのきっかけ

能登半島地震 P2
 こころの支援で生まれた
 被災者とのつながり

つながり支援「青空会」 P3
 ひとりじゃないという
 メッセージを伝え続ける

全国で広がるOBJの支援 P4
 2025年クリスマス・ギビング
 冬～活動報告一覧

東日本大震災から15年

（支援の在り方を問い続けた年月）

誰もが深く傷ついた3.11
 心の支援への導き

家族や愛する人との突然の別れ。

ふるさとを離れ、安心できる居場所を失った方。それらを決して取り戻せないことを知る深い喪失感。仕事や家、土地を失った経済的な悩みも深刻です。支援を続けるうち、時が経つほどに心の支援が必要とされていることがわかってきました。孤独を深め、生きる力が弱まってしまった方のために、寄り添い、心の解放を得ることを目指すこと、それが、OBJの誰も取り残さないための「心の支援」への展開です。

東日本大震災支援からの学びによって生まれたこれらの活動は、現在OBJの支援活動の要となり、全国さまざまなプロジェクトでその知見が生かされています。

未曾有の被害をもたらした東日本大震災。あの寒空の日から15年の時が経ちました。発災の翌日3月12日の朝6時、埼玉県の自宅にいた現OBJ代表のドナルド・トムソンは、OBI(オペレーション・ブlessing・インターナショナル)の本部から緊急支援の電話を受けました。

緊急車両許可を得て、通行止めの東北自動車道を進み、被災地へ入りました。混乱の中で進んだその道は、のちに「Highway of Blessing(祝福の大街道)」と象徴的に呼ばれることになりました。発災から72時間後には被災地への緊急物資配送が開始できたのです。



お米をはじめとする食料支援、灯油やヒーター、発電機、メガネ、漁船まで、迅速な支援を実施できたのは多くの方々の多大なるご支援とご協力によるものです。災害支援における私たちの大切な考え方は、英語でいうと『ASK. DON'T TELL...』。つまり、『ASK』は、現地の人々からの声を聞いて、その要望に答えること。『DON'T TELL』、つまり一方的に「これが必要でしょうから、提供します」ということや「これしか出来ません」というメッセージは伝えません。「必要なものを聞いて、それを届ける」。それが最も大切にしていることです。



●初期支援実績(2011年～2012年)

- ・食料、水、生活物資の支援
- ・燃料、衣類、衛生用品、発電機
- ・メガネクリニックからメガネ5,000着以上
- ・漁業支援(小型船、牡蠣や海苔繁殖の為の漁具を提供)
- ・自治体(例：塩竈市)との連携
- ・復興庁の事例として評価

心の支援で生まれた、被災者とのつながり

あの日から2年、復興の進む能登半島の今

2024年、元日の能登半島を襲った能登半島地震から2年が経ちました。OBJでは、発災直後からすぐに情報収集をはじめ、翌日には支援チームの派遣を決定。1月4日午前には仙台から支援者の皆さまからの支援物資を載せて能登半島へ出動しました。あの日から2年。時とともに変化する現地のニーズに細やかに対応しながら、いまでも独自の支援を続けています。



復興が進むことで 人々の心の回復は対照的に

建物や生活が徐々に再建され、明るく、前向きに未来へ歩む方もいる一方で、経済的な不安や孤独、喪失感に悩まれている方もいます。復興が進むほどに一人ひとりの「心の回復」は二極化しているようです。

いま、私たちは地域団体と連携しながら心理的ケアと生活支援を重点的に行っています。臨時心理士による心のケアを学ぶイベントを行ったり、仮設住宅に出向き物資支援を続けながら見守り・傾聴活動を行ったりと、一人ひとりの寄り添う支援を柔軟に展開しています。

私たちの活動が心の支えになっているという声も

「調子はいかがですか」と声をかけると、「会いに来てくれることを楽しみにしているのよ」「物資なんていらなから顔だけでも見せに来て」と、訪問を喜んでくださる方が多く、確かなつながりが生まれていることを感じます。「本当にありがとう」とわざわざ言葉にして感謝を伝えてくださる方も。

寄り添うことに留意しながら行ってきた月1回の訪問が、「私は忘れられていない、見放されていないんだ」と被災した方々の心の支えになれていることを嬉しく手応えを感じています。

多くの皆さまから支援をいただき、改めて感謝申し上げます。引き続き、ともに能登を想い、心を寄せていただければ幸いです。

※この支援活動の一部はジャパンプラットフォームの助成金を受けて行っています。



能登半島支援 現地からのメッセージ

内灘町 Hさん

震災直後、ご近所に声をかけて一緒に高台へ避難しました。地震の影響で大変なことはたくさんありましたが、今は、地域のボランティア活動に参加しています。OBJ主催の「心と身体健康クイズ」はとても有益で楽しかったです。物資もありがたいですが、会いに来てくれること、それだけでも心の支えになっています。



羽咋聖書教会 永井仁志牧師

2024年の夏、OBJの皆さんにワークショップを行っていただいたことがきっかけで、関わりが生まれました。以来OBJの皆さんとの働きを通して、災害支援とは単に物資を提供するのではなく心の支援でもあることや、目には見えない“心”に寄り添い、仕えることを教えていただきました。心から感謝しています。



仙台の公園で月に一度開かれる炊き出し

「いつもの一杯」が、いざという時につながる

「いろいろあったけど、ここで話を聞いてもらって助かった。今は幸せです」

毎月1回、仙台市中心部の公園で開かれる『青空会』は、路上生活をしている方や、生活に困難や不安、孤独を抱える方に向けて、温かい食事と安心できる居場所を提供しています。

「たまたま賛美の歌を聞いて立ち止まった時、いただいたスープが本当に美味しくて。声をかけてくれた方が親切に話を聞いてくれて、お腹も心も温かくなりました」そんな声が寄せられています。毎回50名以上が訪れ、今年1月で活動は4年目を数えました。

東日本大震災後、住まいや仕事を失い、社会とのつながりを断たれたまま孤立していく人の姿を前に、「どこに助けを求めているのかわからない」という状況そのものが、大きなリスクである

ことを痛感してきました。青空会では、温かい食事や衣類、日用品などの物資を届けるとともに、「あなたはひとりじゃない」というメッセージを伝え続けます。

昨秋には、OBJフードトラックを導入しました。機動力のある設備は、平時の炊き出しを支えるだけでなく、災害時を想定した対応にも活用されています。実際に行った災害対応型の炊き出し訓練では、日ごろ築いてきた関係性が、そのまま非常時の動きにつながることを確認する機会となりました。

生活に困難を抱える背景は人それぞれで、災害による心身の傷が長く影響している場合もあります。こうした人たちが無理なく足を運び、ここで生まれたつながりによって、いつか自分も誰かを支えたいと思えるような「助け合いの輪」が広がることを願っています。



ソーシャル・アクション・プロジェクト

いざというときに「助けて」と言えるつながり

子育て期のママたちの孤独に寄り添う

母子孤立支援 | 静岡県焼津市



「ただ話を聞いてほしい」「子どもが泣いても、気を遣わなくていい場所がほしい」。焼津の『やすらぎカフェ』には、そんな声を抱えた母親たちが集います。幼い子どもを育てる日々は、自分の食事さえゆっくり取れず、悩みを言葉にする余裕もないまま、気づかぬうちに孤立を深めてしまいがちです。

このカフェが生まれた背景には、熱海・伊豆山土石流災害の支援に1年以上関わってくれた教会牧師の存在がありました。支援の現場で、人と人がつながっていく姿を目の当たりにし、「教会も地域に向けてドアを開きたい」と一歩を踏み出したのです。月2回、予約不要・出入り自由で開かれる場では、子どもたちが自由に遊ぶ傍らで、母親たちがお茶を飲みながら思いをこぼします。「ここに来ると気持ちが整理できる」「また頑張ろうと思える」。そんな声が、少しずつ重なっています。

一人ひとりの物語を知り、ともに紡ぐ

高齢者孤立支援 | 福島県浪江町



「トランプでもしよう」と誘ってくれた一人暮らしのMさん。浪江町の飯島信牧師と町内在住のスタッフが行っているのは、高齢者の自宅を月に一度訪ね、お茶やお菓子を囲みながら1時間ほど傾聴するアクションです。知的障害のあるMさんは、回を重ねるごとにしだいに心を開いてくれるように。ある日は、子どものころによく遊んだというトランプに興じ、ソファに倒れこむほど大笑い。心からの笑顔を見せてくれました。

私たちが大切にしているのは「その人の人生そのもの」に焦点をあて、自ら語る言葉にじっくりと耳を傾けることです。過去の楽しい思い出が、今の孤独をやわらげ、生きる力につながる可能性があります。災害支援の現場で、普段から顔の見える関係があるかどうか大きな差を生むことを、私たちは何度も見てきました。この訪問は、そうした気づきから続いている取り組みです。

つながりを、未来へ

災害支援の現場で私たちが学んだのは、いざ災害が起きてからでは遅い、という現実でした。平時から、助けを必要とする人がどこにいるのかを知り、その人たちが地域や社会資源とつながっていることが、命を守る備えになります。ソーシャルアクションは、地域の課題に気づき、動き出そうとする人たちの思いを後押ししながら、平時のつながりづくりを支える取り組みです。



クリスマス・ギビング・アクション 2025

2025年度
報告



心温まるひとつのストーリー

過去3年分のギビングギフトを使って 玄関を飾り、クリスマスを楽しみます。

熱海伊豆山地域1さん

1年前にご主人を亡くし、一人暮らしとなった1さん。訪問すると、玄関の壁にクリスマスのオーナメントが飾られていました。「過去3年分のギビングギフトに入っていたオーナメントやカードを使ったのよ」とのこと。何年も大切に保管し、クリスマスに活用してくださっていることを嬉しく思います。ともに訪問した支援者の幼い子どもの様子に笑顔がふれ、成長を喜んでくださいました。今年のギフトをお渡しすると、袋からオーナメントとカードを丁寧に取り出し、「また壁に飾るものが増えて嬉しい、ありがとう」と目を細め、どのように飾ろうかと思いを巡らせておられました。

全国
11都府県
で実施

ボランティア
94名

受益者
2,591名

今年もクリスマス・ギビング・アクションにご賛同いただき、ご寄付や寄贈を頂いた皆さま、ありがとうございました！

全国で広がる

OBJの支援

この冬の活動をご紹介します。

OBJは、平時から人と人とのつながりを大切にしながら、各地で支援活動を続けています。地域の中で顔が見える関係が少しずつ増えていくことが、孤立を防ぎ、困難に直面した時にも声を上げられる土台となります。こうした日常の関わりが、災害時の支援にもつながっています。



各地の活動の詳細はこちら



子ども・地域を支える

子どもたちと家族が安心して過ごせる居場所を、地域の中で継続しています。



心と健康を支える

こころの支援

心の悩みや健康について、安心して相談できる機会を届けています。

- 個別カウンセリング「こころの相談室」
- 就労移行支援事業所にて、「呼吸法とリラクゼーション法」セミナーを継続
- 臨床心理士と看護師スタッフによる健康相談室を開催



つながりをつくる

生活困窮支援

地域の課題に向き合い、誰も取り残さない支援を広げています。

- 仙台 ●OBJフードトラックが出勤し、炊き出し支援「青空会」
- フードバンク
- 若者支援
- 名古屋 ●生活困窮者支援
- 東京 ●外国人支援
- 福島県 ●浪江町／帰還者支援
- 静岡県 ●焼津市／親子支援「やすらぎカフェ」
- クリスマス・ギビング・アクション



南相馬

- 放課後児童クラブ「ブレスリング・クラブ」
- 地域コミュニティ拠点「ブレスリング・ルーム」

クリスマス期間は特別開放し、ワークショップや季節のイベントを通して、より地域に開かれた場となりました。

熱海

高齢者向け・キッズクラブ向けに、クリスマスの地域交流イベントを開催



被災地とともに歩む

災害支援

被災地のニーズに耳を傾け、物資支援と心のケアを継続しています。

- 物資支援と心のケアを継続中
- 支援活動前にはボランティアを対象に、臨床心理士スタッフによる傾聴セミナーを実施
- 学童クラブでクリスマスイベント

